

日本体育学会
体育哲学専門分科会

会報

Vol.14(4), February, 2011

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 運営委員会からのお知らせ
- ♪ 体育哲学専門分科会のお知らせ
- ♪ 次号予告

巻頭言

目から鱗（うろこ）

加藤敏弘（茨城大学）

子どもの頃、電車の切符に記載されている4桁の数字を1回ずつ全部使って10にする遊びをよくやっていた。四則を使うが、四則は全ての種類を使わなくてもよい。例えば「 $4 \cdot 8 \cdot 5 \cdot 1$ 」であれば、「 $8 + 5 - 4 + 1$ 」のように数字の順番を入れ替えてもよいし、「 $((8 \div 4) \times 5) \times 1$ 」のように演算の結果の数字を想定して計算してもよい。計算の速さを友人とよく競ったものだが、どうしても出来ないこともある。

高校時代ある友人と電車に乗ったとき、私の切符の数字は「 $1 \cdot 9 \cdot 1 \cdot 9$ 」であった。私はすぐに「出来ない」と思った。読者のみなさんには、是非ここで一度トライしていただきたい。私はすぐに諦め、友人の切符と交換した。こちらは簡単に10にすることができた。私はもうすることがないので窓の外を眺めていたが、私の友人は、なぜかずっと私の切符の数字「 $1 \cdot 9 \cdot 1 \cdot 9$ 」を睨んだままである。私は、何度も「出来ないよ」と茶々を入れたが、彼は相変わらず考えている。

しばらくすると、彼は真顔で「できた！」と叫んだ。そして、私に「数字の順番はこのままで必ずできる」とヒントをくれたが、それでも私には到底その解法は思い浮かばなかった。みなさんであれば、このヒントに後押しされてできるに違いない。是非、ここでもう一度トライしていただきたい。

バスケットボールやコーチングのことを少しずつ整理したいと考えていたところ、ある方から鬼界彰夫著『ウィトゲンシュタインはこう考えた』（講談社現代新書）を紹介された。最初は全くわからなかったが、何度も読み進めていくうちに徐々に輪郭が掴めてきた。

『論考』期のウィトゲンシュタインは、フレーゲやラッセルの論理学の影響を強く受け、論理的推論を表現する記号を用いて言語を分析し、「最も客観的で公的なものであるはずの論理の最深部に「私」が存在することを発見する(p.115)」。その後、言語に関して、「日常性への転換、自然史的転換、言語ゲーム的転換」によって『探求』期の思考が展開され、『論考』期の言語観が否定される(p.227)。そして「言語(言語ゲーム)の根底にあるのは規則ではなく「数を数える」とか「同じことを続ける」といった、それ以上は分解も分析もできない原初的な実践であること」すなわち「規則に従う」という実践を我々が行っていることに気がつく(p.352)。その後、ムーアの言明、公的确实性・私的确实性の考察を経て、再び「私」に到達する(p.417)。

まだまだわからないことだらけで原書には手が届かないが、言語ゲームに関する考察は、

「頻繁に変更されるバスケットボールのルールは、プレイヤーの行動様式や観客の観戦様式と関係があるのではないか」ということを探る糸口になる気がする。それだけでなく「痛み」概念の考察や「私はここに手が一つあることを知っている」というムーア言明からの考察は、体育やスポーツの原点にある身体やその関係性につながるような気がする。

私は、職人の世界とも言われるコーチングに身を置いていることや暗黙知は言語化できないことを言い訳に文章化を怠ってきた。しかし、一生をかけて「言語」と「私」を考察し続けたウィトゲンシュタインには及ばずとも、せめて高校時代の友人のように茶々を入れられても「あきらめない」態度で、これまで私の身体の中に刻まれてきた体験を言語化し、さらに理解を深めたいと考えている。

え、解法？「 $(1 \div 9 + 1) \times 9$ 」. $(1 / 9 + 9 / 9) \times 9$ 」. 目から鱗（うろこ）である。既成概念や規則にとらわれるのではなく、私の友人のように「あきらめない」で考え続けるという実践をすることに計算遊びの本当の教育的意味があるのかも知れない。

加藤敏弘 (tosikato@mx.ibaraki.ac.jp)

体育哲学考

半世紀前、日本人女性のからだは賢かった？

大橋奈希左（上越教育大学）

上越に来て、加藤泰樹先生の語られる「実践からの体育哲学」に出会った。そして、広島時代にはじめて「スポーツ哲学」・「体育哲学」の世界に触れさせて下さった樋口聡先生が、前号の会報の巻頭言で、シュスターマンの言を引きながら、「自己の経験の意識的な明瞭化」という立脚点を示されていた。そんな哲学と実践とのかかわりを思いつつ…ここでは、自身の妊娠・出産という経験についての考察からはじめてみたい。

第一子は望むとすぐにやってきた。妊娠・出産という体験は、「自分が哺乳類のメスである」という事実を身を持って実感できるプロセスであった。からだの変化は、命を育む営みであり、ワクワク、ドキドキの連続であった。そんなわけで、待ちに待った第二子を授かったとき、「哺乳類のメスのからだを楽しもう！」という目標を掲げることに迷いはなかった。

この二回目の経験までの間に、長い歳月が流れたので、「忘れちゃったなあ」という感覚もあり、何気なくインターネットで検索してみると、ものすごい量の情報が出てきた。そしてまた、その情報を得るための登録によって、おそろしい数のダイレクトメールが私の元に届くことになる。マタニティグッズや胎児教育、出産準備から学資保険に至るまで、その宣伝と勧誘に驚くばかりであった。妊娠も出産も、情報があふれ…産業と結びつく…「情報産業社会に生きる母」であることもまた実感せざるをえない現代である。「母親はなぜ生きづらいか」（香山リカ著）と題した本が出版されるのも頷ける。

インターネットでは、「もうすぐママになる人の部屋」みたいなサイトがあって、若いママたちが情報交換していたのであるが、年配ママは、ものすごい違和感を感じるようになる。なぜなら、自分というからだやその中に宿った新たな生命と語り合うのではなく、顔も知らない、どこにいるかもわからない、ペンネームで語る相手に、自分の体や新たな生命について質問したり、相談したりするという営みが、またこれもものすごい数でなされていたからである。だが、少し立ち止まって考えてみれば、「妊娠したかも」と思って、産婦人科に行く私の行為も、構造としては同じなのでは？と自問自答してみたりする。

そして、第29週の検診。「逆子です。また戻るかもしれないしね。」と言いながら、お医者さんは、かわいい赤ちゃんの記号を、先月とは逆向きを書いてみせた。「へー、なるほど、

お姉ちゃんのときは、逆立ちしてみたり、一輪車に乗ってみたりいろいろ試していたけど、高齢だから自粛したら、本人が逆立ちしちゃった…。」体育教師のママだもの逆立ちくらいするよねと思いつつ、助産師さんの教えてくれた体操を試してみる。何日かやっているところ「一回戻ってまた逆さまになってたりして…」などと感じてくる。

そして次の検診でも記号は逆のまま…。「来月になっても、逆子のままだったら帝王切開だね。」とお医者さんに軽く言われてしまった。「あらまあどうしましょう。逆子のまま生むことはできないのかしらん…。ご対面する前の大事な協働の営みを人任せにするのはどうも…。」と思いつつながら本屋にぶらっと立ち寄って、三砂ちづる氏の著書「オニババ化する女たち」に出会う。「目から鱗の歴史的事実」と「まさに核心！」と思える主張が繰り返して出てきて、一気に本屋で読んでしまった。

三砂氏によると、今70歳代、つまり私の母親の年齢から、病院での出産が主流になったという。その10年前の世代は、家で自分で出産していたらしい。よほどの場合でなければ、産婆さんのお世話になることもなかったとある。そして、驚いたのは、「月経血も止めていたので現代のような生理用品は必要なかった」という事実であった。

いつから、このような日本人女性のからだの知は受け継がれなくなってしまったのだろうか…。からだの知を伝えるという体育の営みは、半世紀前には、日本人女性の親子の間でなされていたのである。そして、逆子も昔は産婆さんが手で直していたという話を耳にしたりとすると、便利になればなるほど、からだの知が失われていることに危機感さえ感じる…。そんなことを考えながら行った第33週の検診。無事、逆子は直っていて、自然分娩でこの世に出てきた第二子ももうすぐ二歳になる。そんなわけで、次に親になる世代の方々へのメッセージは、ダンスセラピーのT・シュープ女史にならって、「からだの声を聞いてごらん」である。

生きづらい現代において、情報や産業に煽られることなく、人と本との出会いを大切にしながら、「自分のからだやその動きの経験」や「からだからからだへと知が伝授される実践」を考察していくこともまた、「体育哲学」という学問ならではの営みであってほしい。

大橋奈希左 (nagisa@juen.ac.jp)

書籍紹介

『日本人の脳に主語はいらない』月本洋 講談社選書メチエ 2008

田井健太郎（東京医科歯科大学）

興味深く読んでいた著作で引用された文献は、さっそく取り寄せるようにしている。そうしていると、次から次へとアマゾンや文献複写サービスからモノが届くので、どの本の引用文献であるのか判別がつかなくなってしまう。本書も、何処かで引用されていた書である。このタイトルだけでは、自分で手にとることはなかったと思う。

日本語は主語が省略される、とよく言われる。「私」「あなた」「彼」「彼女」等の人称代名詞も省略されることが多い。言語学では、「日本語に主語があるか、ないか」の論争があり、現在まで決着がついていないそうである。著者は、この問題に、脳科学および言語学・心理学等の研究成果に基づき、新たなアプローチを試みている。本書では、「母音の比重が大きい言語では、主語や人称代名詞がよく省略される」という一般的な傾向に注目し(p. 2)、日本語の音声的な特徴と、主語を必要としない日本人の脳の特徴とが密接な関係にあることを、多種の実験によって明らかにしている。とりわけ興味深い点は、本書の構成に明らかである。

本書は、

1. 人は言葉をどのように理解しているか
2. 仮想的身体運動としての想像
3. 仮想的身体運動による言葉の理解—身体運動意味論
4. 心の理解—仮想的身体運動による心の理解
5. 母音の比重が大きい言語は主語や人称代名詞をよく省略しやすい
6. 主語の省略は母音で決まる—身体運動統語論
7. 文法の終焉

の全七章よりなっており、第二章以降は言語理解に重要な「イメージ」と、これに密接に関わる「身体」を中心に話がすすんでいく。

「仮想的身体運動」が、本書の主要な概念である。一般に、「想像」は「頭の中に思い描くこと」であることから、身体は介在しないように考えられる。しかしながら、20世紀前半にはすでに、「たばこ」や「スキー」をイメージするとき、唇や脚などの関係する部位に電気信号的反応があることが確かめられている。「イメージを描くとき、たんに脳だけが働いているのではなく、そのイメージに関係のある筋肉等の身体が関与している」(p. 28) のである。

つまり、想像するとき活動する脳の部位と実際に動かすときに活動する脳の部位は基本的には同じなのであり、著者は、身体を動かす脳神経回路における実際の身体運動（電氣的レベルではなく実際の運動）をとみなわない活動を「仮想的身体運動」と定義するのである。

もちろん、厳密には、一部の想像に身体運動が対応しているというだけであり、いわゆる「想像」と仮想的身体運動は区別されねばならない。「想像」はあくまでも心理現象だが、仮想的身体運動は物理現象だからである。つまり、仮想的身体運動には、心の中でイメージする（想像）だけでなく、脳の神経回路が筋肉等にパルス信号を（間引いてであれ）送ることが必要なのである (p. 43)。本書で明らかにされたことは、心身がきわめて密接に関連しているという事実である。

かつてスポーツの定義の条件の一つに、「大筋群の運動を伴うもの」という条件があった。しかし本書では、筋収縮を伴わずとも脳内にこれ同様の信号が生じることが明らかにされた。このことは、これまで「非-身体的行為」と思われてきた「イメージ」にさえ、身体が不可欠であることを示している。「身体運動」という概念は、限定詞つきであれ拡張されつつあり、われわれの体育やスポーツに関する定義も、いずれ更新を求められるかもしれない。

月本は本書の論構成の主軸を、身体意味論（イメージ）と用法意味論（言葉の使い方）の対立に置いているという。われわれは常に、自身の内的イメージと世の中での言葉の使用のせめぎ合いの中にあるというのである。ここには、体育実践やスポーツ・コーチングの現場において、われわれが長年にわたって取り扱ってきた主題と通底するものがある。

とすれば、今なすべきことは、こうした脳科学分野が示す実験データを十分に参照しつつも、われわれのフィールドから、固有の、かつ先進的な知見を発信していくことであろう。

本来、本書は新刊された際に読んでおく本であった。web書店の閲覧からは、長く購入機会のなさそうな本でもある。改めて、引用文献の取り寄せは可及的速やかに行うべきであることを知ったのである。

田井健太郎 (taiklas@tmd.ac.jp)

坂本拓弥（千葉大学大学院）

現在、私は修士論文「運動部活動の構造分析 - 基盤としての身体性に着目して -」の提出に向けた最終段階にあります。このテーマは、私のこれまでの経験から導き出されたものです。運動部活動は、他に類を見ないほど教育的可能性に満ちた場であると同時に、信じられないような非道徳的な指導がなされる場でもあります。

また、一事に専心して取り組む素晴らしさを体現できる者がある一方で、所謂「頭まで筋肉」といわれるような状況に陥ってしまう者もいます。このような両義性を有する運動部活動は、一体どのような原初的構造を有しているのでしょうか。この問いが、私の直接的な研究動機です。

修士論文では、「指導者間」「生徒間」「指導者 - 生徒間」の三つの関係性をそれぞれ分析し、最終的にこれらの複合的な関係性から成立している運動部活動の構造を探っています。その際、「模倣」や「ハビトゥス」という概念を手がかりに、「身体性」という視座を設定しています。「身体性」に着目したのは、われわれが無自覚・無意識的に、すなわち、身体レベルにおいて学び、そして伝承している事象や、「体育会系」的体質と呼ばれる運動部集団に特有の集団的特質の生成機序を、この身体レベルに着目することで解明できるのではないかと考えたからです。なぜならば、運動部活動において生成する事象や集団的特質は、言語で論理的に理解して身につけるものではなく、無意識のうちに、まさに身につけている（ついでに）ものだからです。

特に、「体育会系」的体質の内的構造を解明するために、私はルネ・ジラル（René Girard, 1923-）の《三角形的》欲望論を参照しています。《三角形的》欲望とは、われわれ（主体）の欲望が対象に直線的に向かうのではなく、他者（媒体）の欲望を模倣することで成立することを示したものです。そして《三角形的》欲望は、その《形而上的効力》により、場を共有する者にも波及します。つまり、多くの主体と媒体は互いに欲望し合うことで、それぞれの欲望を際限なく増大させ、その結果、判断力を麻痺させ、現実感覚を失っていくこととなります。この状況をジラルは、「相互媒介の地獄」と呼びます。

時に侮蔑的意味で使われる「体育会系」という用語が示唆する閉じた集団的特質は、このような「相互媒介の地獄」に陥っている状況と深く関わると考えられます。つまり、運動部活動という場では、指導者と生徒がともに「相互媒介の地獄」の中で勝利を欲望し、それが唯一絶対の対象となります。そして、集団外の対象に対する判断力や現実感覚を失っていくと考えられるのです。それゆえ、「体育会系」以外の人々からは特殊と見なされる体質が生成されるのです。

従って、運動部活動の原初的構造を明らかにすることは、同時に、「体育会系」的体質の生成機序を解明することにもなるのです。もちろん、この「体育会系」的体質は、「善」の側面も有しているため、この原初的構造はその「善」と「悪」の両義性の生成機序に関わるものです。修士論文ではこの点についても検討しています。

ところで、私が修士論文において「身体性」に着目したことの背景には、身体そのものの意味や価値、そしてその「はたらき」に対する強い関心があります。これは、われわれの生が身体的な存在として在ることの意味を問いたいという私の問題意識にもなっており、修士論文以降はこの問いについて、特に教師の身体に焦点を合わせて取り組んでいきたいと考えています。

坂本拓弥（takuya_sakamoto_1987@ybb.ne.jp）

運営委員会より

新保 淳(静岡大学)

今年度の日本体育学会（於：鹿屋体大）に関する情報

- 1) 学会大会のホームページ (<http://www.jspe62.nifs-k.ac.jp/index.html>) が立ち上げられています。そちらから大会参加等の申し込みができます。
- 2) 2011年（平成23年）5月13日（金）が参加・申し込みの締め切りです（延長はありません）。

分科会メーリングリストへのご登録のお願い

メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、分科会活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げる次第です。以下のような手順で登録できます。

- 1) グループへ参加するには、事務局：新保（ehashin@ipc.shizuoka.ac.jp）までご一報ください。事務局にて登録の手続きをさせていただきます。
- 2) 登録完了後、taiikutetsugaku@yahooogroups.jp を用いてグループメンバーにメッセージを配信することができます。

定例研究会のお知らせ

舛本直文（首都大学東京）

平成22年度第3回定例研究会（大学院セッション）を2011年3月5日（土）に下記の要領で開催いたします。

なお、研究会終了後 **18時より懇親会** を予定しております。会員の皆さま、ぜひともご参集ください。

- ・ 日 時：2011年3月5日（土）14：00～17：30
- ・ 会 場：立正大学大崎キャンパス5号館（2階512教室）
大崎駅・五反田駅から徒歩5分、大崎広小路駅から徒歩1分
(大崎駅/JR山手線・湘南新宿ライン・埼京線・りんかい線)
(五反田駅/JR山手線・都営地下鉄浅草線) (大崎広小路駅/東急池上線)
山手通り沿い、大崎警察署の隣です。
- ・ お問い合わせ：090-4207-7376（釜崎）

発表内容

①高崎雄悟（静岡大学大学院）

「ストリートサッカーに関する研究—文化論的視点から—」

本研究は、ストリートサッカーとはどのような思想的背景を持って誕生してきたスポー

ツであり、また、どのような身体文化の生成を行なっているのかについて明らかにした。結論としては、遊びの要素における模倣や眩暈に特化した「身体とボールが生み出す動き」に注目した身体技法を生成していること。ゴールを奪いに行く機会とゴールを得る喜びの機会の減少に対して、別の喜びの機会を増加させていること。「身体とボールが生み出す動き」に注目することで、必然的にドリブルの価値や頻度が高まることを見出していることが明らかにされた。

②坂本 拓弥（千葉大学大学院）

「運動部活動の構造分析—基盤としての身体性に着目して—」

本研究の目的は、「善」「悪」双方を生成する運動部活動の原初的構造及びそれに基づく「体育会系」的体質の生成機序を解明することである。具体的には、運動部活動が、言語レベルでは捉えられない「指導者間」「生徒間」「指導者 - 生徒間」という三つの関係性から構成されていることに着目する。

これら三つを身体性という視座からそれぞれ考察し、その複合的關係性を明らかにすることで、運動部活動の教育的功罪の原理論的検討を行なう。

③鈴木明子（東海大学大学院）

「余暇における感性と身体性についての一考察」

本研究の目的は、ピーパーの余暇論を再検討しつつ、身体の側面から捉えた余暇のあり方についての考察を試みることである。本稿では、ピーパーが余暇の本質として扱う「コンTEMPLラチオ（観想）」の内容を明らかにした上で、余暇の概念の中に身体性を見出す手がかりとして「感性」という能力を検討した。

結果として、コンTEMPLラチオに到達するためには自己と対象とのかかわり合いが不可欠であることが確かめられ、そこに感性の関与がみとれた。感性とは、身体的な自己と環境の間に生じるかかわり合いを捉える能力のことである。

ピーパーによればコンTEMPLラチオは一貫した精神的態度であるとされるが、感性の概念を考慮することによって、精神を含めた身体的な自己の営みとして捉えることができるのである。

次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は釜崎太（立正大学：kamasaki@ris.ac.jp）までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門分科会報第14巻第4号

発行者 日本体育学会体育哲学専門分科会

大橋道雄（会長）

編集者 阿部悟郎（広報委員長）

発行日 平成23年2月10日

連絡先 989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南2-2-18

仙台大学体育学部

0224-55-1147（直通）

アドレス：gr-abe@scn.ac.jp

【編集後記】

年が明けたと思ったら、はや二月の如月。如月は、もともと「衣更着」だったとか。スキーウェアを重ね着され、寒風に雪原を愉しんでらっしゃるのではないのでしょうか。そんな中、掲載させて頂いた興味深い文章や研究発表の情報の数々、卯年も有意義に進行中。さて、三月弥生の定例研究会は今年度最後の公式行事。雪焼けのご尊顔もそのままに、若手の旅立ちをも祝しつつ、いざ五反田・大崎！（A 拝）